

子どもたちの心の叫び

— 大人や社会が問われているものは何か？ —

ファミリーメンタルクリニックまつたに

吉沢伸一

コロナ禍での見通しのつかない不安が続く中、感染予防策としてとられた様々な日常の変化は必要ではあるものの、子どもたちの心の状態に多様な影響を及ぼすことになった。ここでは私が心理療法を通して関わる小学生の心の動きから、コロナ禍の影響も含めて検討し、「子どもたちの思い」について考えてみたい。個別ケースには特異性があるものの、普遍的要素もあると私は考えているので、二つのケースをここでは取り上げてみたい。

ケースA

現在高学年のA君は、両親の不和を背景に、盗癖や暴力の問題を主訴として三年前から私が関わっていた。現在は家庭環境も落ち着き、A君自身の主訴も解消されつつあった。両親は元来の性格に加え仕事が多忙で、A君の気持ちを汲んで理解することが難しかった。それで一時期A君は荒れていたが、さすがにこれでは大変だと両親は以前よりも協力し合い

A君と向き合おうとした。それに呼応してA君の問題行動は減少したが、自分の本当の気持ちを理解されない怒りと、あきらめの気持ちに私たちは取り組んでいた。この頃、両親が在宅でテレワークとなったのだが、日常的な感情のぶつかり合いが増した。彼はその不満を私に話したが、次第に彼も両親と激しくぶつかり合うようになった。この時期、彼は私に「僕なんて、いなくなってもいいんだ」「僕は必要とされていないんだ」と話した。そして、私にも「僕はここに居ていいの？」と話した。私は「当然だよ、君はここに居ていいんだよ！」と強く伝えたい切ない気持ちにもなっていたが、その言葉が一瞬だけの慰めのように感じ、彼の孤独感の前では何か軽薄な言葉のように感じてならなかった。

ケースB

学校で孤立しがちな低学年のBちゃんは、母子家庭で一人っ子として育った。母親は情緒不安定で、ある時は母子一体化することで安定し、

ある時は別に関心が向きBちゃんへのネグレクト傾向があり、養育態度には一貫性を欠いていた。コロナ禍で母親は職を失い、家に居ることが多くなったが、うつ傾向が増した。Bちゃんにとっては、いつも家に居てくれる母親にはなったが、いつも心がそこにならないように経験していた。また、唯一の親友の女の子がいたが、コロナの影響による家庭の事情で疎遠になっていた。彼女は、人形を使いたく様々なストーリーを展開させる遊びをしていたが、この時期は、コロナ菌を街にまき散らす美しい魔女に急変する女性、何もしない女性、魔女と戦う小さな女の子が登場した。女の子は魔女と戦い、いつもコロナ菌にやられてしまうが、何もしない女性はその場でただ見ているだけで助けてくれなかった。女の子が魔女を追い詰めることもあったが、その後は必ず机から落ちて死んでしまい、何とも言えない無力感が面接室には漂っていた。彼女は、何もしない女性に向かって「あなたはいったい何しているの？ どうして助けてくれないの！」と言い放った。その言葉

は、私自身にも突き刺さるよう
感じられた。

安心感・安全感の揺らぎ

コロナ禍における「子どもたちの
思い」という言葉から私が想起した
のは、この二人とのやりとりを通し
た私の戸惑いであった。子ども
の心理療法を実践している臨床家ならば、
このピネットで示される心の動きや
私との交流が、必ずしもコロナ禍に
特有のものではないと気づくだろう。
子どもに生じる問題は、彼らの気質
と育った家庭環境の影響、家族以外
の様々な人々や出来事による影響が
絡み合い生じている。今回私があら
ためて考えることになったのは、
個々に背負っている歴史的背景だけ
ではなく、現在の社会背景も当然な
がら影を落としているということだ
ある。

コロナ禍の影響は潜在的にあつた
問題を顕在化させる作用があつたこ
とがよく言及される。A君の両親の
仕事在宅になり家での情緒的な接
触が増しストレスが高まったこと、

Bちゃんの母親が職を失いうつ状態
になつたことや親友と疎遠になつた
ことは、コロナ禍の直接的な影響で
ある。

次に、それらの影響により浮き彫
りになつた彼らの「思い」について
考えてみたい。A君からは居場所の
なさ、自己の存在意義の不確かさ、
そして孤独感が浮き彫りになつてい
る。私は、何らかの言葉かけです
ぐに払拭できる類のものではないこと
に戸惑つた。Bちゃんからは安定し
た信頼感のある他者の存在感を実感
できない複雑な気持ちが浮き彫りに
なつている。とりわけ助けを求めて
も何もしてくれないという訴えに私
は動揺した。二人に共通しているの
は安心感や安全感の基盤のなさであ
つた。

私たち大人の安心感や安全感とい
うものは案外不確かなもので、何ら
かのやり方でそれが露呈しないよう
にバランスをとっている。しかし、
コロナ禍において私たちは多かれ少
なかれその均衡を保つことが困難に
なつた。家族内では密になり、家族
外での人や場所とのつながりは希薄

となつた。安心感や安全感の脆弱さ
を、家族と一定の距離を置き、家族
外の他者や場所とのつながりで何と
かカバーしてきた人にとっては何
の均衡が崩れる経験になつたのでは
ないだろうか（再度立て直した人、
逆に安定につながつた人もいるだろ
う）。

眼差しの方

「僕はここに居ていいの?」「あな
たはいったい何しているの?」どう
して助けてくれないの!」と私に向
けられた言葉は、彼らの実生活と深
く関わり、彼らの心の世界における
叫びとしてだけではなく、現在の社
会における大人に向けられた「子ど
もたちの思い」の一部を代弁してい
るように私には聞こえてならない。

私たち大人は次第にコロナ禍にも
順応したように見えるが、見通しが
持てず余裕をなくし潜在的・顕在的
に不安を抱え、安心感・安全感の基
盤は揺らいでいる。私たちは、子ど
もたちの思い、心の叫びを真に受け
取ることが簡単ではない状況にいる

のだろう。自分に関心を向け見守り
続ける信頼できる大人が傍に居てこ
そ安心感や安全感を経験でき、自分
はここに居ていいんだ、存在してい
いだ、生きていく価値があるんだ、
人を信頼し頼つてもいいんだ、と言
葉を超えて経験できることを二人の
訴えは示唆している。「子どもは社
会を映し出す鏡」と言われるが、こ
のコロナ禍において、子どもの思い
を受け取る大人の存在意義が改めて
問われているのではないだろうか。

昨今私は、心理療法の場では出会う
子どもたちが抱える問題は、私たち
が生きている社会の歪の一部である
とより一層強く感じる。とりわけ小
学生の時期は、気持ちを言葉にして
他者に伝えることが難しい時期であ
る。「子どもたちの思い」、それは私
たち大人が、たとえ動揺したとして
もその思いを受け取る意思がなけれ
ば、いづれ異なる別のかたちで大人
たちに、社会に向けられることにな
るだろう。いじめ、非行、ひきこも
り、自殺、自傷、様々な精神症状や
問題行動として。

